

# 待兼山俳句会

吟行

第六百八十九回 世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡 翠・根来眞知子

東中乱・向井邦夫・森 茉衣

日 時 令和六年六月三十日（日） 会場 こどもみらい館 締切 午後二時三十分

出席者 瀬戸幹三・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡 翠・東中 亂・向井邦夫（計六名）

吟行地 京都府立植物園 陶板名画の庭（植物園のそば）

句会場 こどもみらい館（地下鉄烏丸線丸太町駅から徒歩五分）

京都地下鉄烏丸線北山駅を降りたところにある植物園。梅雨時で午前中は小雨があつたが、まもなく雨も止んだ。百合や紫陽花、その他の花の咲き乱れる苑を、ゆっくり思うまま散策できた。有難いことに、暁子さんは吟行には参加されなかつたが、後で選句をして下さつた。

次 回 例会 令和六年年七月二三日（第四月曜日） 会場 大阪俱楽部会議室 締切 午後二時

兼題 水遊・日盛（幹三） 滝・草いきれ（暁子） その他当季雜詠

選者吟

青梅雨の深み深みへ歩み入る

森深く息ととのへる梅雨の蝶

蓮巻葉ほどけて雨を受けにけり

幹三

## 幹三選

### 幹三 特選句講評

◎梅雨止めば姫と鳩の対話かな

翠

梅雨空にただ一輪のジヤカラソダ

邦夫

◎百合の香の雨の花壇に淀むなり

乱

梅雨ふかしオーブンカフエの濡れて黙

輝子

地に這へる大樹の枝に梅雨しとど

兵十郎

◎巨木また巨木見上ぐる梅雨晴間

輝子

咲き乱る百合の匂をつつむ雨

兵十郎

倒木の芯に洞あり蟻の群

輝子

◎踏み惑ふ芝地にそつと捩り花

兵十郎

大賀蓮開く音聞かむ板橋に

輝子

花蕊に確と目を留む大賀蓮

兵十郎

梅雨晴間餌を運ぶ鳶鳴き交はす

輝子

◎ゆつくりと動く水車に苔の花

邦夫

雨含む百合の香いとど妖しくて

乱

蓮の葉に銀の滴の育ちゆく

輝子

百合大輪あらゆる憂さを跳ね飛ばす

翠

梅雨止めば姫と鳩の対話かな

翠

梅雨の一休みという感じがよく出ています。おばあ

さんの優しい表情も見えるようです。

百合の香の雨の花壇に淀むなり

乱

百合の香りには独特の強さや重さがあります。雨の中という場面設定もよく効いています。

巨木また巨木見上ぐる梅雨晴間

輝子

雨あがりの森にぽつんといいる小さな人間、という景  
が見えました。しつとり濡れた黒々とした巨木に囲ま  
れているのです。

踏み惑ふ芝地にそつと捩り花

乱

思わず踏みつけそうになつた！危なかつた！とい  
う状況が捩花の可愛さとよく合います。青芝を背景に  
して赤紫の小さな花が抗議しているようです。

ゆつくりと動く水車に苔の花

邦夫

観察の目がよく行き届いています。ゆつくりとした動きと苔の花のバランスがとてもよく、水音もあいました。のんびりした田園風景が浮かびました。

## 暁子選

濃き赤のひまわり我と対峙せむ

兵十郎

作り瀧水の重さを落しけり

幹三

梅雨晴間忙しなく鳴る水琴窟

輝子

黄とピンクの百合とたはむるビーナス像

翠

芋の葉の水耐え切れず溢れ出づ

兵十郎

◎青梅雨の深み深みへ歩み入る

幹三

百合の香の雨の花壇に淀むなり

幹三

◎森深く息ととのへる梅雨の蝶

幹三

◎巨木また巨木見上ぐる梅雨晴間

輝子

◎倒木の芯に洞あり蟻の群

兵十郎

真つ直ぐに天指す蓮の蕾かな

幹三

風あれば花ゆれ葉ゆれ半夏生

幹三

蓮葉陰三三五五とアメンボウ

輝子

梅雨の蝶日々褪せてゆく翅の色

幹三

双頭蓮片方先に落ちてをり

乱

ゆつくりと動く水車に苔の花

邦夫

蓮の葉に銀の滴の育ちゆく

輝子

百合大輪あらゆる憂さを跳ね飛ばす

輝子

## 互選三句

### 邦夫選

真つ直ぐに天指す蓮の蕾かな

幹三

雨含む百合の香いとど妖しくて

乱

百合の香も森の香もあり植物園

兵十郎

梅雨の京都植物園を二つの「香」で上手く表現した。

兵十郎

### 輝子選

大賀蓮開く音聞かむ板橋に

兵十郎

蓮巻葉ほどけて雨を受けにけり

幹三

青梅雨の深み深みへ歩み入る

幹三

梅雨らしい雨の一日。濡れて歩いて納得できる表現。

兵十郎選

参加者自選句

踏み惑ふ芝地にそつと捩り花

乱

蓮の葉に銀の雫の育ちゆく

輝子

京湧水水琴窟の梅雨の音や

輝子

梅雨で水嵩の増えた水琴窟の音が軽やかに響き合つた。（追記 下五の「や」は無いほうが良い。）

翠

翠選  
百合の香も森の香もあり植物園

兵十郎

青梅雨の深み深みへ歩み入る

幹三

森深く息ととのへる梅雨の蝶

幹三

蝶は死を待つているのではなく飛翔のため休んで

幹三

い  
る  
の  
だ

乱選

梅雨ふかしオーブンカフエの濡れて黙

輝子

半夏生まだら模様に花隠し

兵十郎

咲き乱る百合の匂をつつむ雨

輝子

雨に淀む百合の香を「つつむ雨」で見事に表現した。

花菖蒲盛り過ぐるも競ひ合ふ

邦夫

風あれば花ゆれ葉ゆれ半夏生

輝子

倒木の芯に洞あり蟻の群

兵十郎

梅雨激し審判する者される者

輝子

雨含む百合の香いとど妖しくて

乱

付記 句会後、選句して下さった暁子さんは、次の

ような言葉をお寄せになりました。

・お詫び 岭行に参加できなかつたので、現場にいなくとも理解できる句を選びました。正しい選が出来ていなかもしれませんがご容赦下さい。講評は控えさせて頂きます。

・ホツトリップス赤き唇虫呼べり

虫は秋の季題になつてゐるので、「ホツトリップス昆虫を呼ぶ朱唇かな」。